

2015年度 大阪大学 前期 国語

I 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	30分	許光俊『クラシック魔の遊戯あるいは標題音楽の現象学』からの出題。許光俊は、クラシック音楽評論家・文芸評論家で、近代の諸芸術と芸術批評を専門としている。	大阪大学(文系・文学部以外)の国語では例年、大問一・二で現代文(評論)が出題されている。出題形式は毎年異なるが、二つの大問の中で、漢字や語句についての知識から長短の論述まで、幅広い形式での出題がなされている。漢字・語句などの知識を問う問題での失点が目立つ場合、そもそもその知識不足によって正確な読解ができない可能性があるため、まずは早急に知識をつける必要があるだろう。必要な知識が身につけているならば、適切な読解・表現の練習を重ねることで十分に得点できるようになるはずだ。

解答

- 問一 (a) 手際 (b) 看過 (c) 繊細 (d) 無邪気 (e) 止揚
問二 ウ

問三 クラシック音楽の演奏は、演奏者の手でもとの楽譜に囚われない新たな美を宿した時点から、原作とは独立に評価を得るということ。(60字)

問四 最晩年のチェリビダッケによるラヴェル版の『展覧会の絵』の演奏について、効果的な編曲の妙を生かしながらそのときその場所で音楽が生まれているかのように感じさせるその深遠さを、「音楽とは経験である」という彼の言葉を引きつつ、彼が作曲家・指揮者・演奏家・聴衆といった区別なしに、携わる全員が一体になるという境地へ至ったゆえのものであると論じたものの、その演奏を録音で聴いたのみで彼の音楽を「経験」したわけでない筆者は、自身の主張がまとるところ推測に過ぎず、完全な説得力を原理的にもちえないと自覚しているから。(250字)

本文解説

段落解説

【A】 演奏による楽譜を超えた美の創造(第1・第2段落)

演奏するという行為の本質は、楽譜に書かれていることやその制作意図を可能な限り再現しようとするのではなく、楽譜にもとづきながらも新たに解釈を加えることで美を創造することだ。演奏には、楽譜に込められた理念の具体化としての側面も存在するし、その次元において演奏は楽譜をもとに批判される。しかし、楽譜を乗り越えた美の創造という観点に立てば、演奏は楽譜を基準とした評価から解放されるのである。

【B】

I ラヴェル版『展覧会の絵』(第1〜第5段落)

ピアノ独奏のために書かれたムソルグスキの『展覧会の絵』は、現在に至るまで数々の作曲家によってオーケストラ用に編曲されてきた。その中でも特に愛されているのが、ラヴェルによって編曲されたものだ。ムソルグスキーがピアノのみで作りだした世界とは打って変わって、ラヴェル版は楽器法の効果に富んだ、非常にきらびやかなものとなっている。ラヴェルの編曲は素晴らしいものであるが、この曲の演奏の多くがラヴェルの編曲の効果に依存し、その枠を出ないつまらないものとなってしまっていることは嘆かましい。

II 最晩年のチェリビダッケによる『展覧会の絵』(第6〜第9段落)

しかしそんな中、一九九三年のチェリビダッケによる演奏は、ラヴェルの編曲の妙を示しつつ独自の美を創造することに成功した珍しい例だ。演奏家と聴衆とが呼吸を合わせて、そのときその場所で音楽を生み出すかのような演奏は、彼の「音楽とは経験である」という言葉に言い表されている。

【百字要旨】

【A】

演奏するという行為は、楽譜の正確な再現を試みるのではなく、楽譜をもとに独自の解釈を加え、原作に囚われない新たな美を創造することであり、このプロセスは演奏を伴わざるをえないクラシック音楽の本質である。

(100字)

【B】

ラヴェル版の『展覧会の絵』の演奏は、彼の編曲の妙に依存したつまらな

いものばかりだが、チェリビダッケによるものは例外的に素晴らしい。彼の演奏は、会場にいる全員で一体となって音楽を創造するかのようである。

(100字)

【用語解説】

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

畢竟 ひつぎょう つまるところ。つまり。所詮。結局。

弁証法 意見と反対意見との対立と矛盾を通じて、より高い段階の認識に至る哲学的方法。

【設問解説】

問一

解答 (a) 手際 (b) 看過 (c) 繊細 (d) 無邪気 (e) 止揚

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

【解説】

(a) (c) (d) は、カタカナで書かれた傍線部からどんな単語か迷うこととはないだろうから、きっちり得点したいところである。逆に、(b) (e) は迷ったりわからなかったりする人も多いだろうと思う。(b) の「看過」は「見過ごす」という意味の熟語である。同音異義語に「感化」があるが、音楽の宿命がいかに決定的であるかを強調させる文脈であることを踏まえると、ここでは当たらない。(e) の「止揚」は弁証法で使われる用語で、ざっくり言うとならば「対立する考えどうしを統合して、よりよい考えを生み出すこと」といった説明になる(ここでは哲学的に厳密な説明に立ち入ら

ない)。「使用」「私用」「仕様」といった同音異義語を書いた人は、「止揚」という語を知らなかったであろうと思うが、知っていて損のない概念であるからこれを機に覚えておきたい。

問二

解答 ウ

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

傍線部の「改竄」は「もともとあるものを不当に改めなおすこと」という意味の語である。アの「糊塗」は「誤りをごまかすこと」のような意味なので不適。イの「窮鼠」は「追い詰められたねずみ」のことなので不適。エの「改訂」は「内容を改めること」といった意味であるが、「不当に」のニュアンスを持たないため不適。オの「捏造」は「本当はないことをでっちあげる」という意味なので、紛らわしいが不適。ウの「歪曲」は「ことごとがらを意図的にゆがめ、曲げること」という意味なので、「改竄」の言い換えとして選択肢の中で最も適当である。

問三

解答 クラシック音楽の演奏は、演奏者の手でもとの楽譜に囚われない新たな美を宿した時点から、原作とは独立に評価を得るということ。

(60字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型・具体化型

解答範囲 【A】(特に第2段落)

解説

この問題では本文と設問を読んで第一に、「現象」と「理念」との関係を引きちんと整理して理解せねばならないという見立てが立つと思う。相当文章を読み慣れている人でもない限り、第2段落を一読した段階ではこんがらがってよくわからなくなるだろう。解答作成を焦らず、本文の論理関係をじっくりと理解していこう。

第1段落では、演奏という行為の楽譜に対する二種類のスタンスを挙げている。「楽譜の正確な再現を試みる」というスタンスと、「楽譜を乗り越えた美の創造」というスタンスとである。また、前者が譲歩の構文で述べられていることから、筆者としては後者を推したいのだろうというニュアンスを読み取ることができる。

第2段落は「しかしながら、」という言葉から始まる。ここである程度現代文を解き慣れている人であれば、「逆接の後に本当に言いたいことが来るのだろうな、つまり、第1段落で推していた、原作を乗り越えた美の創造としての演奏のあり方は不適切で……」というふうに読みの方角を定めてしまいかもしれない。しかし、ここは注意が必要なところである。文章の内容のみを吟味すれば、第2段落2文目以降の内容は第1段落の主張を補強するものであり、第2段落1文目の内容は、第2段落2文目以降の主張を補強している。つまり、この「しかしながら、」は実質的に逆接として機能しておらず、あえて目をつぶらなければならないということだ。(このような用法で「しかし」「しかしながら」を使うのは非常にまれなケースであるが、「しかし今日はいい天気ですね」「しかしながら、生きるというのは大変なことだ」というような例が存在する。)

第2段落の前半では、「演奏・実際の音」と「原作」との弁証法めいた関係について述べられていることがわかる。また、後半では「現象」と「理念」

との関係が述べられている。そして、前半部と後半部とを結ぶのが、第2段落6文目の「あるいは言い換えるなら、」という文言である。第2段落6・7文目から、「演奏」「原作」がそれぞれ「現象」「理念」に対応していることがわかり、結局のところ、第2段落において二回にわたり述べられている「演奏・現象」と「原作・理念」との関係を追うべきであるとわかる。

さて、そろそろ解答作成へ向けた読みをしていこう。まず、傍線部に対して最低限施すべき換言の処理は大きく分けて二つ。「現象・理念」「ある地点で身をもぎ離す」の二点を適切に換言する必要がある。「現象・理念」が「演奏・原作」と換言されることはすでにふれた。「ある地点で身をもぎ離す」については少し考えないといけない。直前の部分を読むと、「ある地点」に達するまでは「理念を基準として現象を批判することができる」という内容が読み取れる。これはつまり、現象の評価には理念の存在がついて回るということを意味する。ここから、「身をもぎ離す」は「現象に対する評価基準としての理念の無効化」を意味するのではと推測することができる。そこで傍線部直後に目を向けると、「ある地点に達して身をもぎ離したら、理念と現象という関係が解消される」ということがわかるが、これは、現象の評価の際に理念が無関係となることの帰結であり、推測が正しそうだ判断できず。では、判断基準としての理念が無効化される「ある地点」とは何だろうか。これは第1段落を読んで考える必要がある。第1段落では、アーヨやイムジチによる原作通りでない演奏に対する、極端な評価の例が二つ上がっている。すなわち、「冒険であり改竄でしかない」と「このうえなく意義のあるもの」との二つだ。この二つの評価を分けるものはただ一点、演奏が新たに創造する美を重視するかどうか、承認するかどうか、という点である。ここから、傍線部の「ある地点」は、「演奏による新たな美の創造が認められた時点」といった意味であることがわかる。

ここまでの要素をつなげて、字数制限を満たすように推敲すると、「クラシック音楽の演奏は、演奏者の手でもとの楽譜に囚われない新たな美を宿した時点から、原作とは独立に評価を得るということ。」(60字)となるので、これを解答とする。

《解答要素》

- ① 「現象・理念」を「演奏・原作」と具体化していること。
- ② 「ある地点」が「新たな美が創造された時点」であることにふれていること。
- ③ 「身をもぎ離す」が「現象の評価基準としての理念の無効化」であることにふれていること。

《参照箇所》

- ① 第2段落6・7文目
- ② 第1段落
- ③ 第2段落9文目

問四

解答

最晩年のチェリビダッケによるラヴェル版の『展覧会の絵』の演奏について、効果的な編曲の妙を生かしながらそのときその場所で音楽が生まれているかのように感じさせるその深遠さを、「音楽とは経験である」という彼の言葉を引きつつ、彼が作曲家・指揮者・演奏家・聴衆といった区別なしに、携わる全員が一体になるといふ境地へ至ったゆえのものであると論じたものの、その演奏を録音で聴いたのみで彼の音楽を「経験」したわけではない筆者は、自身の主張がつまるところ推測に過ぎず、完全な説得力を原理的にもちえないと自覚しているから。(250字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型・理由説明型

解答範囲 【B】

解説

この問題は200～250字という、比較的多めの分量の字数指定がなされている。「そんなにたくさん何を書けばいいのか」と困ってしまう人もいるだろうが、その場合、「何が問われているか」をきちんと理解できていない可能性が高い。設問は必ず説明にそれだけの字数が必要な内容を問うているはずであるから、しっかりと「何が問われているか」を見極めることができれば、設定された字数の分量は問題でなくなるはずだ。(その上で難しい問題ももちろんある。)

さて、「何が問われているか」を考えよう。本問は「なぜ」を問う問題であるが、まず注意すべきは「～と筆者が言うのはなぜか。【B】の文章から考えられるところを述べなさい」という問い方だ。本問は、傍線部の内容について直接「なぜ」と問うのではなく、その内容を筆者がわざわざ述べたという事実「なぜ」を突き付ける問いである。そして、その「なぜ」の理由は【B】の文章を読んで、自分で考えねばならない。設問文を読んだ時点で、本文中に明示された因果関係をまとめるタイプの「なぜ」ではないことを読み取り、強く意識したうえで解答作成に入ってほしい。

では、「なぜ」とその理由とについて考えを進める。傍線部を含む一文を読むと、この文が何かを譲歩する気分で書かれていることは明らかであろう。つまり、その「何かを譲歩する気分」について詳しく述べなければならぬ。ではそもそも、譲歩というものは何のためのものかということ、自分の主張に対して予想される反論を、前もって防ぐためのものである。ということとは、「本文【B】に対して、傍線部の文言で防いだり弱めたりできる反論

が予想される」ということを書けばよいということがわかる。

早速その反論ポイントを探し出そう。傍線部を含む一文は「彼が死んで」という文言で始まっており、傍線部の内容はこの「彼」、すなわちチェリビダッケについての記述にまつわるものだということは明らかであるから、該当箇所を中心に読めばよいだろうとあたりをつけることができる。読んでいくと、筆者は本文【B】の後半で、チェリビダッケの演奏の素晴らしさについてひたすら述べており、最後には「経験」という言葉を引いて会場全体の一団感を表現していることがわかる。ここで一つ、疑問に思ってもらいたいところがある。「この筆者自身はチェリビダッケの音楽を実際に会場で聴衆として『経験』しているのか？」という点である。答えはノーだ。筆者は、演奏を録音で聴いて、そこからこの文章を書いているに過ぎない。すなわち、「実際にその場にいなかった人間が、録音を聴いただけで、会場の一体感のようなものを論じることは不可能なのでは？」という、クリティカルな反論が予想されるというわけだ。

ここまで読み取ることができれば、あとは字数に沿うようにうまく解答を構成すればよい。チェリビダッケによるラヴェル版『展覧会の絵』の演奏に対する筆者の評価を【B】全体の要約のような形でまとめ、その後、その評価の根拠が弱いことについての自覚という要素を付加すれば解答となる。ここでは、以下を解答とする。「最晩年のチェリビダッケによるラヴェル版の『展覧会の絵』の演奏について、効果的な編曲の妙を生かしながらそのときその場所で音楽が生まれているかのように感じさせるその深遠さを、「音楽とは経験である」という彼の言葉を引きつつ、彼が作曲家・指揮者・演奏家・聴衆といった区別なしに、携わる全員が一体になるという境地へ至ったゆえのものであると論じたものの、その演奏を録音で聴いたのみで彼の音楽を「経験」したわけではない筆者は、自身の主張がつかまるどころ推測に過ぎず、

完全な説得力を原理的にもちえないと自覚しているから。」(250字)

《解答要素》

- ① 一九九三年の演奏に対する筆者の評価が、「経験」の部分に重きを置いてまとめられていること。
- ② 筆者は一九九三年の演奏を録音で聴いたのみであるということにふれていること。
- ③ ②の内容ゆえに①の内容が説得力を欠いてしまうということについての筆者の理解を示唆していること。

《参照箇所》

- ① 【B】全体(特に第9段落)
- ② 第6段落
- ③ なし

(森慎太郎、丸岡賢人、梶凌慎)

2015年度 大阪大学 前期 国語

Ⅱ 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	30分	『大森荘蔵著作集第五巻』による。大森荘蔵(1921-1997)は岡山県生まれの哲学者。東京帝国大学(現東京大学)理学部物理学科・東京帝国大学文学部哲学科を卒業し、東京大学教授も務めた。物的自然に偏った二元論的な科学の見方を批判し、自然と私を一体とする一元論を展開した。『流れとよごみ』『時間と自我』『時間と存在』などを著書とする。	自然科学の見方に関する文章であった。前半では自然が無色無味無臭の微粒子かどうかに関する議論がやや冗長に続いたが、論理の流れは明快で論旨を掴むのはそれほど難しくなかっただろう。大阪大学では自然科学に関する問題が頻出するので、核となる考え方は押さえておくこと。 問一は肯定・否定双方の立場から理由を説明させる問題であった。読んでいる部分問いを肯定する論なのか、否定する論なのか、意識しながら読む必要があった。問二・問四は字数の多い問題で、比較的広い範囲から解答を作成することになり、論旨明快な解答を書くことができるかが試さ

傾向と対策

だが、本文の順番のまま記述すればよく、それほど難しくなかっただろう。
短い制限時間の中で筋の通った解答を書けるよう、過去問を中心に演習を積んでほしい。

解答

問一 (Y)科学的二元論において意識と区分された物的自然の概念では、感

覚は事物として「自然」に存在しえない(47字)

(N)私たちは日常的常識で感覚が物的自然の事物の性質そのものとして「自然」に存在することを確信している(48字)

問二 事物は感覚的性質を持たず、感覚をひきおこす性質のみ持つとする結論は、感覚が物的自然の事物の性質そのものだと確信する私たちの日常的常識に反して、一方を物的自然、他方を感覚や意志や感情や思想、一括して意識と呼ばれるものと区分する徹底した科学的二元論に基づいて、感覚を物的自然から剥離させているから。(147字)

問三 ウ

問四 私たちは感覚を物的自然の事物の性質そのものと確信する日常的常識をよそに物的自然の概念をたて意識と区分する徹底した科学的二元論を科学的常識として受け入れ、日常的に両者を適当に使い分けている。しかし非日常的に緊張した場面で科学的二元論は常識におぼろな不安を感じさせる奇怪な思想を生んでおり、科学的二元論がいかなるものであるか正視することで、そうした思想に立向うことが必要とされているから。(193字)

本文解説

段落解説

I 自然は無色無味無臭の微粒子か(第1段落～第9段落)

導入として自然科学の見方が紹介される。自然科学の発達は、「自然」概念そのものを変貌させた。自然科学の見方では、赤熱の太陽も、紺碧の海も、太陽や海が赤く青いのではなく、それらからの電磁波が網膜に結像して発生する神経パルスによってひきおこされた色の感覚に他ならない。そして太陽や海自体は無色無味無臭の微粒子の集まりにすぎない。

前述のように自然科学は無色無味無臭の微粒子からなる物的自然の概念をたて、そこでは色や音のような感覚は私たちの神経にひきおこされたものにすぎないとみなされる。しかし、本当に感覚は脳をつくる粒子の様々な運動にすぎないのだろうか、と筆者は問う。「自然」は音もなく、味もなく、色もなく存在し、私たちの感覚をひきおこすだけなのだろうか。

以降第9段落まで音・色という感覚を例に自然科学において「自然」が私たちの感覚をひきおこす性質しか持たないことが示される。

音の感覚を考える。鈴の「チリンチリン」という音は「物」ではない。音は血や月のように「物」としてでることもできないし、電波がでる出方とも異なる。物的自然の概念上、どのように考えても音は「自然」の中の事物ではありえない。「音がする」のは自然の中の出来事ではなく、感覚の中の出来事なのである。

II 二元論という非常識(第10段落～第12段落)

事物は私たちに感覚を「ひきおこす性質」を持っているだけだとする結論について筆者は非常識のものにみえると言う。第10段落のみでは筆者の言わんとすることはわからないだろうが、第11段落で非常識とはすなわち徹

底した二元論であることが語られ、第12段落で二元論が科学的常識として呑みこまれ、日常的常識と科学的常識が使い分けられていることが指摘される。

常識は一方で「物的自然」の概念の枠をたてながら、他方でその枠をゆるめて物的自然を感覚化しており、この賢明な常識は日常生活の熟知された狭い場をはなれ、非常識に広い視野で世界なり人間なりを統一的に眺めようとするときは、非常識に直面し、その非常識を呑みこまねばならない。

では、今呑みこまなければならぬ非常識とは何だろうか。すでに書いたようにそれは徹底した二元論、つまり一方に「物的自然」を、他方に感覚や意志や感情や思考、一括して「意識」と呼ばれるものを区分する考えである。〈I〉で見たように「物的自然」という概念をたてるかぎり、「意識」はそこから剥離せざるをえない。感覚を「物」が持つ、ということが「物」の概念からして意味がなくなるのである。

この二元論は現在科学的常識となり、日常的常識と科学的常識がうまくあやつられて使われている。物自身が色を持ち、音を放つということを日常的常識において私たちは確信している一方で、物が無色の分子の集合であり、音や色は私たちの神経興奮にすぎないことも科学的常識として知っている。私たちの常識は科学的二元論の非常識に適度に馴れ、それを適当にあしらっているのである。

III 二元論の解剖学(第13段落～第14段落)

二元論を科学的常識として日常的常識と使い分けた結果、非日常的な場面において二元論は暴走していると筆者は言う。

日常的な場面でおだやかに馴らされた二元論は、非日常的な場面において様々な奇怪な思想を生んでゆき、常識でそうした思想を否定しようとも

これらの思想は常識におぼろな不安を感じさせる。

そうした思想から逃れられないならばそれらに真正面から立向うしかない。そのためには二元論が果してどういふものであるかを正視すること、二元論がどのようにして生み出され、どのような論理構造をもっているか、どのような短絡と思いきみをもっているか、つまり二元論の解剖学が必要となる。それはすなわち「物的自然」としての自然概念の解剖学でもある。以上が筆者の主張である。暴走する二元論がもたらす奇怪な思想に対して、私たちはそれがどういふものであるかを理解することで立向うべきというのである。

百字要旨

自然は無色無味無臭の微粒子の集まりだとする科学的二元論の見方は、科学的常識として日常的常識と使い分けられ奇怪な思想を生んでいる。この思想に正面から立ち向かうべく二元論を正視する二元論の解剖学が必要だ。

(100字)

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

物的 物に関するさま。物質的。

生理学 生体またはその器官・細胞などの機能を研究する学問。

二元論 ある対象の考察にあたって二つの根本的な原理または要素をもつて説明する考え方。

- ① 宇宙の構成要素を精神と物質との二実体とする考え方。デカルトの物心二元論は代表的な例。

- ② 世界を善悪二つの原理(神)の闘争とみる宗教。ゾロアスター教・

マニ教など。

設問解説

問一

解答 (Y) 科学的二元論において意識と区分された物的自然の概念では、感

覚は事物として「自然」に存在しえない(47字)

(N) 私たちは日常的常識で感覚が物的自然の事物の性質そのものとして「自然」に存在することを確信している(48字)。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 I (第1～第9段落)、II (第10～第12段落)

解説

「自然」が無色無味無臭の微粒子でただ私たちの感覚をひきおこすだけかどうか、肯定・否定双方から問う問題である。傍線部は「ひき起こすだけなのだろうか」と問いかけの形で終わっているため、傍線部以下にこの答えが書かれているはずである。読み進めていこう。

傍線部直後、第3段落冒頭から音の感覚についての考察が始まる。第3段落の内容はかなり具体的なので50字の解答に抽出するのは難しいだろう。第4段落の1・2文目の「こうして、音の感覚は『自然』の事物でも場所でもありえない。物的自然の概念自体が音の感覚を排除するのである」に注目する。物的自然の概念では、音の感覚は「自然」に存在しないことが書かれているが、「物的自然」とはどういうことか、はっきりしない部分も多い。読み進めていく。

第5～第8段落にかけて色の感覚についての考察が展開されるが、かなり

具体的であり、話も二転三転するので解答に加えるには難しいだろう。第9段落では冒頭に「こうして『ひきおこす性質』を持っているだけだ」とあるように、傍線部と同内容が述べられている。「こうして」とあるため、前述の理由を追いたいところだが、すでに述べたように煩雑であるため、解答に抽出しづらい。

第10段落の1・2文目の「この結論(＝事物は私たちに色覚をひきおこす性質があると言えるだけのものになる＝傍線部と同内容)はしかし『物的自然』という概念をたてる限りこうならざるをえない」に注目する。結局、傍線部を肯定する理由は「物的自然」の概念にあることが第4段落の1・2文目の内容とあわせてわかるだろう。「物的自然」とはどのようなことか読み進める。

物的自然に関して述べられている第11段落に注目する。2・3文目に「それ(＝非常識)は徹底した二元論である。つまり、一方に『物的自然』、そして他方に『意識』と呼ばれるものの区分である」とある。物的自然は科学的二元論において、意識と徹底して区別されており、それゆえ9文目にあるように「感覚を『物』が持つ、ということが『物』の概念からして意味がなくなるのである」。

以上より、「自然」が無色無味無臭の微粒子でただ私たちの感覚をひきおこすだけかどうか、肯定する答えの理由として、「科学的二元論において意識と区分された物的自然の概念では、感覚は事物として『自然』に存在しない」といえることができる。

ここで解答が同語反復にならないように注意しよう。例えば、『自然』は無色無味無臭の微粒子の集まりであり、音・味・色は私たちの神経がひきおこした感覚である」のような、傍線部以前を用いて解答を作ったものは注意が必要である。このような解答は傍線部を語句レベルで言い換えたものにする

ぎず、傍線部を肯定的にとらえる理由としての意味合いがまったく表れていない。

次に、否定的な答えの理由はどこにあるのか見ていく。第11段落3文目に「常識は他方でその枠をゆるめて物的自然を感覚化している」とある。つまり、常識が、前述のように意識と区別され無色無味無臭の微粒子たる物的自然に色や音、臭いなどの感覚を認めているというのである。第12段落に注目すれば3文目に「絵具を見るとき、その絵具自身に色がついていることを私たちは確信している」とあり、また5文目に「鈴から音がすることを確信している」とある。つまり、私たちは「自然」が無色無味無臭の微粒子でないことを常識として確信しているというのである。

以上より、「自然」が無色無味無臭の微粒子でただ私たちの感覚をひきおこすだけかどうか、否定する答えの理由として、「私たちは日常的常識で感覚が物的自然の事物の性質そのものとして『自然』に存在することを確信している」といえることができる。なお、表現であるが、第5段落7・8文目の「色は物的自然の事物の性質そのものだと感じられる」や「事物に『ついている』性質として自然の中に居所を持つ」など解答に利用しやすい表現があつたため利用した。このように本文中に解答として使いやすい表現があれば活用しよう。

《解答要素》

(Y)

- ① 物的自然の概念は意識と区分されている
- ② (①により) 物的自然の概念では、感覚は事物として「自然」に存在しない

(N)

- ① 感覚が物的自然の事物の性質そのものとして「自然」に存在することを日常的常識で確信している

《参照箇所》

(Y)

- ① 第11段落2・3文目
② 第4段落1文目・第11段落9文目
(N)
① 第5段落7文目・第12段落3文目

問二

解答

事物は感覚的性質を持たず、感覚をひきおこす性質のみ持つとする結論は、感覚が物的自然の事物の性質そのものだと確信する私たちの日常的常識に反して、一方を物的自然、他方を感覚や意志や感情や思想、一括して意識と呼ばれるものと区分する徹底した科学的二元論に基づいて、感覚を物的自然から剥離させているから。(147字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅱ(第10段落～第12段落)

解説

「この結論」が非常識にみえる理由を問う問題である。「この結論」とは傍線部前第9段落の「事物は私たちに色覚をひきおこす性質があると言えるだけのものになる」とする結論である。さて、非常識とはつまり常識に反するということであるから、「この結論」がどのように常識に反しているのか、という方向性で本文を読んでいくことになる。

第10段落3文目に「常識は、一方で『物的自然』の概念の枠をたてながら他方でその枠をゆるめて物的自然を感覚化している」とある。問一で述べたように、私たちは日常的常識で、感覚が物的自然の事物の性質そのものとして「自然」に存在することを確信している。つまり常識とは感覚が物的自然の事物の性質そのものとして「自然」に存在するということである。では「この結論」はこの常識にどのように反するのだろうか。

第11段落に注目する。1・2文目に「では今呑み込まねばならない非常識とは何だろうか。それは徹底した二元論である」とある。二元論とは3文目にあるように「一方に『物的自然』、そして他方に感覚や意志や感情や思想、一括して『意識』と呼ばれるものの区分である。」また、6文目にあるように二元論において「意識」は『物的自然』から剥離せざるをえない。」

これらの記述から、私たちは常識において感覚が物的自然の事物の性質そのものだと確信しているにもかかわらず、二元論は一方に「物的自然」、そして他方に感覚や意志や感情や思想、一括して「意識」を区分し意識を「物的自然」から剥離させていることがわかる。以上が「この結論」が非常識、つまり常識に反している理由である。

解答は「この結論」を具体化し、「非常識」である理由を述べて「事物は感覚的性質を持たず、感覚をひきおこす性質のみ持つとする結論は、感覚が物的自然の事物の性質そのものだと確信する私たちの日常的常識に反して、一方に物的自然、他方に感覚や意志や感情や思想、一括して意識と呼ばれるものと区分する徹底した科学的二元論に基づいて、感覚を物的自然から剥離させているから」とした。

《解答要素》

- ① 事物は感覚的性質をもたず、感覚(色覚)をひきおこす性質のみもつと

する結論

② 私たちの日常的常識では意識は物的自然の事物の性質そのものだと確信される

③ ②に反して①の結論は科学的二元論に基づいて、意識を物的自然から剥離させている

※「なぜか」と問われているので、「から」「ため」などで終わること。

《参照箇所》

① 第9段落4文目

② 第5段落7文目・第12段落3文目

③ 第11段落7文目

問三

解答 ウ

難易度 ★★☆☆

設問パターン 特殊型

解答範囲 本文全体(特に第13段落)

解説

空欄部を補うのにふさわしくないものを選ぶ問題である。空欄を補うにふさわしい内容・ふさわしくない内容とはどのようなものか、本文から読み取る。

空欄が含まれるのは第13段落の3文目である。『(空欄)』について、常識では馴染めない思想がそこから生まれてくる」とあるため、空欄に入る内容は前の部分から考えられるはずである。第13段落の1・2文目に「この日常的な場面でおだやかに馴らされた二元論は、非日常的に緊張した場面ではその網をふりほどいて暴走する。そして様々な奇怪な思想を生んでゆく」

とある。よって空欄に入る内容は二元論で考えられる内容でなければならぬ。二元論とは前の問題で述べたように一方を物的自然、他方を意識として区分する論である。

選択肢に目を向ける。アの運命は、物的自然と切り離された「意識」、感覚や意志や感情や思想に属するものであるため適当である。イの道徳も同様に、物的自然と切り離された「意識」として考えられるため適当。ウの法と社会に関しては、二元論で考えることは難しい。法に関して「意識」の一つとして挙げられていた思想に当てはまると言えないこともないだろうが、社会は物的自然にも意識にも区分されない。社会を統御するのが法であり、両者の関係において二元論が入り込む余地はない。よってウの法と社会は不適当である。エの生と死に関しては、物的自然の考え方からすれば、脳波の有無や心臓の拍動から捉えられる一方で、意識から考えれば意志の有無や感情・感覚の要素から捉えることができるので、多分に二元論的な要素を含んだ概念であるといえる。よって適当。オの脳と意識に関しては、ヘイにあるように意識を司るのが脳であり、意識とは脳の神経系によってもたらされるものであるとする二元論的な考え方が可能である。よって適当。

空欄を補うのに不適当な内容を選ぶ問題なので、ウの法と社会が解答となる。

問四

解答

私たちは感覚を物的自然の事物の性質そのものと確信する日常的常識をよそに、物的自然の概念をたて意識と区分する徹底した科学的二元論を科学的常識として受け入れ、日常的に両者を適当に使い分けている。しかし非日常的に緊張した場面で科学的二元論は常識におぼろな不安を感じさせる奇怪な思想を生んでおり、科学的二元論がいかな

るものであるか正視することで、そうした思想に立向うことが必要とされているから。(193字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 Ⅱ(第10～第12段落、特に第12段落) Ⅲ(第13・第14段落)

解説

「二元論の解剖学」が必要とされる理由について問われている。まずは「二元論の解剖学」とはどういうことか読み取ろう。

傍線部であるが、「つまり、二元論の解剖学が必要となる」の「つまり」以下から始まるので、二元論の解剖学とはどういうことか直前に記述があるはずである。傍線部を含む一文に「この二元論がどのようにして生み出され、どのような短絡と思いきみとをもっているか、つまり二元論の解剖学」(第14段落3文目)とあるので、二元論の解剖学が「二元論がどのようにして生み出され、どのような短絡と思いきみとをもっているか」正視すること、であるのは簡単に理解できるだろう。

次に「二元論の解剖学」が必要な理由について考える。第13段落と第14段落から読み取ることができる。第13段落1・2文目に「この日常的な場面でおだやかにかい駈らされた二元論は、非日常的に緊張した場面ではその網をふりほどいて暴走する。そして様々な奇怪な思想を生んでゆく」とあり、また4文目に「これらの思想は煙霧のようにそこにしみ入って常識に形の定まらぬおぼろな不安を感じさせる」とある。さらに第14段落1文目に「これらの思想から逃れることはできないとすれば、それらに真正面から立向う以外にはない。」とある。以上を読めば明らかのように、二元論の解剖学が必要な理由は、「非日常的に緊張した場面で暴走した二元論が生む、常識におぼろな不安を与える奇怪な思想に立向うため」である。

さて、二元論はなぜ「非日常的に緊張した場面」で暴走し、「常識におぼろな不安を与える」のだろうか。第12段落から読み取る。第12段落2文目に「私たちは日常的常識と科学的常識をつまぐあやつって適当な使い分けをしている」とあり、7文目には「私たちの賢明な常識は科学的二元論の非常識に適度に馴れ、それを適当にあしらっている」とある。私たちは二元論を科学的常識として日常的常識と適当に使い分けており、それゆえ適当な使い分けを許さない非日常的な場面で二元論が常識におぼろな不安を与えるのである。筆者はこのような事態に立向うべく、二元論を適当にあしらうのではなく正視すべきと述べているのだ。

以上より解答は「私たちは感覚を物的自然の事物の性質そのものと確信する日常的常識をよそに、物的自然の概念をたて意識と区分する徹底した科学的二元論を科学的常識として受け入れ、日常的に両者を適当に使い分けている。しかし非日常的に緊張した場面で科学的二元論は常識におぼろな不安を感じさせる奇怪な思想を生んでおり、科学的二元論がいかなるものであるか正視することで、そうした思想に立向うことが必要とされているから」となる。

《解答要素》

- ① 科学的二元論を科学的常識として受け入れ、日常的常識と適当に使い分けている
- ② 非日常的に緊張した場面で科学的二元論は常識におぼろな不安を感じさせる奇怪な思想を生む
- ③ 科学的二元論がいかなるものであるか正視することで、そうした思想(②)に立向うことが必要とされている

※「なぜか」と問われているので「から」「ため」などで終わること。

《参照箇所》

- ① 第12段落2・7文目
- ② 第13段落2・4文目
- ③ 第14段落1・2文目

(井小路馨、森岡桃子、高橋粒)

2015年度 大阪大学 前期 国語

Ⅲ 古文(紀行文)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	15分	二条良基『小島のすさみ』からの出題。南北朝時代の歌人・連歌師である二条良基による紀行文。二条良基は、関白・太政大臣・摂政などを歴任した公卿であったが、博識で歌道に通じ、生涯指導的立場にあって連歌の興隆に貢献した。	紀行文ということもあって本文の内容を把握するのは容易だが、設問の要求に応えらるとなると深い読解力が必要になる。 問一は、確実に得点したい問題。訳すのに文法的難しさはないが、(2)の「草の枕」や(3)の「才覚」など知っていそうで知らない単語にうまく対処する必要があった。問二は尼が年老いていることと「老蘇の杜」という名前から「んときてほしい。確実な読みのみならず発想力が必要。問三は、問二で、「老蘇の杜」が老いの隠喩となっていることに気づけていればひらめくことができたはず。問四は、「和歌に用いられた修辞をふまえて」という指示に注意。問五は傍線部直前の内容が読めれば答えられるが、そもそも「憂き名」が訳せないと厳しいところ。

傾向と対策

文章が短く、文法的難しさもなければ、訳しづらい単語もそれほどない。しかし、読み取った情報から推理するとう、大学入試古文においてしばしば必要になる力が試される問題が多いので、苦手な受験生はしっかり復習しておく。

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか(「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分)や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど(「通読」の★部分)について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使いすぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識で作れる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使う。

解答

- 問一 (1) ほかの木はまったく混じっていない。
(2) 今夜一晩の旅寝も、どこにするのがよいか。

(3) このあたりの知識がありそうだったので

問二 杜の名が、年老いた尼を表す「老蘇の杜」だということ。

問三 三十過ぎの良基にも、尼と同様「老蘇の杜」に象徴される「老い」は他人事でないということ。(43字)

問四 旅の苦勞を思つて流した涙と、野洲川を渡りながら浴びる川の水。

問五 歌人・連歌師ともあろう良基の、旅の道中で数々の名所に触れながら、田舎の旅による衰弱を理由に、歌を詠まずに通り過ぎたことを非難する悪い評判。(69字)

本文読解

本文を読み始める前に

前書きから、本文は歌人・連歌師の二条良基が旅の途中でみずから記した紀行文であることをおさえておくとな非常に読みやすくなる。

通読

第1段落第1行「老蘇の杜、見所多し。」

◎現代語訳の設問箇所にはなっているが、内容的な重要度は低めな自然描写なので軽く読めばOK。良基は「老蘇の杜」というところに来たらしい。

第1段落第1行、第4行「道遠く、行くぞ答へし。」

◎設問に大きくかわかる部分。時間をかけて読もう。宿を探していた良基が年老いた尼に出会い、杜の名前について話している場面。

第1段落第4行、第6行「かかる者のくすぎの下蔭」

◎尼の返答のどこが「心ある」「あはれ」なのかよく考えよう。自分の年齢と「老蘇」をかけるのはたしかにうまい返事だ。

◎この出来事を受けて良基が詠んだ歌。老いは自分にとっても他人事ではないという内容。「すぎ」は「杉」と「過ぎ」の掛詞になっている。

第2段落第1行、第2行「乱り心地なもりける。」

◎(注)を参考にしながら読む。「ありし」はここでは「以前の・さっきの」という意味で、「来た道」のことを指しているのだろう。

◎体調も優れず、旅はなかなか順調にいかないようだ。

第3段落第1行、第2行「また、野洲よりかぬらん」

◎「老蘇の杜」を離れた後、野洲川を渡ったときに詠んだ歌(詳しい解釈は設問解説を参照)。

第4段落第1行、第3行「犬上鳥籠のくぞ侍る。」

◎名所は訪ねたかったけれど、旅の衰弱でそれすらもわずらわしくなってしまったらしい。歌人ということもあって、周りの評判を気にしている。

設問解説

問一

解答

《合格答案》

- (1) ほかの木はまったく混じっていない。
 (2) 今夜一晩の旅寝も、どこにするのがよいか。
 (3) このあたりの知識がありそうだったので

《満点答案》

- (1) ほかの木はまったく混じっていない。
 (2) 今夜一晩の旅寝も、どこにするのがよいか。
 (3) このあたりの知識がありそうだったので

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(1)

副詞「さらに」は、打消を伴って「まったくくない」という意味になることを思い出そう。直訳すると、「ない木はまったく混じっていない」となる。これでは意味がわからないので、直前に注目。「ただ杉の梢ばかりにて」とあるから、「ただ杉の梢だけがある」という描写に矛盾しない内容が続くはず。となると、「あらぬ木」が「杉以外の木」を指している可能性が高い。「こ」で、「あらぬ」は、「さあらぬ」||「そうでない」||「杉でない」の「さ」が省略された形ではないかと推測できると完璧。「杉ではない木」「杉以外の木」「ほかの木」などと柔軟に訳そう。また、「あらぬ」を「別の・違った」を意味する連体詞として捉えて、「別の木」||「杉以外の木」という思考過程でも解答に至る。

(2)

「草の枕(草枕)」は、「旅寝」の意だが、知らなければ文脈から読み取る

しかない。「行き暮れぬれば」から、だいたいの時刻や空の明るさなどが想像できる。夕暮れ頃だろうか。また、草の「枕」というくらいだから、「休息・寝床・宿」といった意味なのだろうと推測すれば、言葉自体の意味を知らなくても、ほぼ正確な訳出が可能。「いづく」の意味は「どこ」「いづくにか」の直後には「あらむ」「よからむ」などが省略されていると考えられる。里人におすすめの旅寝の場所を尋ねているのだろうと場面を想像し、省略を補って訳す。

(3)

「才覚」は「知識・知恵」などの意を表す。傍線部末「なりしかば」は、分解すると、断定の助動詞「なり」の連用形+過去の助動詞「き」の已然形+接続助詞「ば」となるので、《合格答案》のような訳になる。「才覚」の意味がわからなければ文脈から推理しよう。良基は、尼に「このあたりのくがありそうだったので」「この杜の名前を尋ねたのだ」という文脈が読み取れば、「知識」という訳を当てるのはそう難しくない。

問二

解答

《合格答案》

杜の名が、尼の名であるということ。

《満点答案》

杜の名が、年老いた尼を表す「老蘇の杜」だということ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

傍線部(A)は尼の、良基の問いかけに対する返答であるので、まずは良基の「この杜の気色こそいと情け深く見え侍れ。名をばなにと申すにか」という発言に注目する。杜の雰囲気を褒めた後、名前を尋ねている。ちなみに、尼がまず「これなん古き名所に侍りける」と返答しているように、ここでの話題は「杜」であって、尼の名前を尋ねているわけではないので注意。普通なら、良基のこの問いかけに対し、「老蘇の杜」と答えるだろう(冒頭に書いてある)。しかし、尼は「尼が年の名にて侍る」と答えた。この意図を答えさせようというのがこの問題の趣旨である。「尼が年」とあるので、尼の年齢についての記述がないか探してみると、2行目に「年長けたる尼」と書いてあった。ここで「老蘇の杜」の「老」という字と「尼の年」が掛けられているのだということに気づく。これらを踏まえて尼の返答の意図をまとめよう。

問三

解答

《合格答案》

三十を過ぎた良基にとっても、尼と同じく、老いは他人事ではないということ。

《満点答案》

三十過ぎの良基にも、尼と同様「老蘇の杜」に象徴される「老い」は他人事でないということ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

問二からもわかるように、本文において「老蘇の杜」は「老い」の象徴と

して登場している。この「今は身の老蘇の杜ぞよそならぬみそぢあまりもすぎの下蔭」という歌は良基が詠んだもので、「身の老蘇の杜」は、身体の老いを表現している。後半に「みそぢあまり」とあることから、良基は三十歳を過ぎていたということが読み取れるので、「老蘇の杜」が「よそならぬ」というのは、身体が老いが良基にとっても他人事でない、ということの意味しているのだとわかる。これらの内容をまとめる。

問四

解答

《合格答案》

旅の苦勞からくる涙と、野洲川の水。

《満点答案》

旅の苦勞を思つて流した涙と、野洲川を渡りながら浴びる川の水。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 和歌

解説

「いつまでと袖うち濡らし野洲川の安げなき世を渡りかぬらん」は、良基が野洲川を渡るときに詠んだ歌。「袖を濡らす」といえば思い浮かぶ「涙」と、川を渡る場面ということから推測できる「川の水」が解答の中心になることは見当がつく。だが、問題文に「修辞をふまえて」という指示があるので、これだけでは不十分。「いつまでと袖うち濡らし」で区切ると、良基が長い旅の苦勞を思つて涙を流す様子が思い浮かぶ。「袖うち濡らし野洲川の安げなき世を渡りかぬらん」で区切ると、野洲川の水に濡れる良基の様子が想像できる。「渡る」は「(川を)渡る」と「(世を)渡る」の掛詞。以上の解釈を踏まえたうえで、二つの要素にそれぞれ説明を加える。和歌の訳は現代

語訳参照。

問五

解答

《合格答案》

良基の、田舎の旅による衰弱を理由に、旅の道中にあった数々の名所を素通りしたことを非難する悪い評判。

《満点答案》

歌人・連歌師ともあろう良基の、旅の道中で数々の名所に触れながら、田舎の旅による衰弱を理由に、歌を詠まずに通り過ぎたことを非難する悪い評判。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

「憂し」は「つらい・嫌だ」、「名」は「名声・評判」の意味。よってここでいう「憂き名」は「悪い評判」のこと。「げに後までも憂き名洩らすな」とあるので、良基にとって、伝え漏れると困る悪い評判とはどんなものかと考えてみる。ヒントは直前「かかる旅の空にすぎすぎしからんもうるさくて過ぎ侍りし鄙の衰へ」にある。ここでは、「すぎすぎし」は「風情がある」、「うるさし」は「わずらわしい」の意味。「鄙の衰へ」は(注)に「田舎の旅による衰弱」とあるので、良基は、風情ある名所に触れながらも、旅の疲れからわずらわしいと思って素通りしてしまったのだということが読み取れる。では、素通りしてしまった良基は本来何をすべきだったのか。それが歌を詠むことである。風情ある物事に触れると歌を詠みたくなってしまふのがこの時代の人たちの性さがというもの。まして良基は歌人・連歌師である(前書きには

重要な情報があふれているのでよく読むこと)。今回の良基の行動がうわさになってしまえば本人も困るだろう。よって解答は、この良基が恐れる悪評の内容を説明したものとなる。

本文解説

現代語訳

老蘇の杜という所は、ただ杉の梢があるばかりで、ほかの木はまったく混じっていない。山のふもとにかけて眺める末は、とても見所が多い。道は遠く、行き暮れてしまったので、輿を置いて、「今夜一晩の旅寝も、どこにするのがよいか」と里人を呼び出して質問すると、年老いている尼が一人出て、この辺りの知識がありそうだったので、「この杜の様子はとても趣深く見えます。名をなんと申しますか」と尋ねたところ、この尼の言うことには、「こは古い名所でございますよ。尼の年を表す名でございます」という趣旨を答えた。このような者の中にも情緒を解する物言いは、まったく田舎らしいとも思われず、とても感心して、

今は身の……(今はもうこの身にとって老蘇の杜(＝老い)も他人事ではありません、杉の下蔭で三十年余りも過ごしてしまっただけですから)気分が悪いのもやはりわずらわしかったので、一晩は泊まって、病気の間の発作が起きない日にだけ来た道の行く先は、順調にはいかず、日数ばかりが積もった。

また、野洲川とかいう川を渡るといので、

いつまでと……(いつまで旅が続くのかと涙で袖を濡らし、野洲川の水で袖を濡らして、川を渡るように、安らかでないこの世を渡りかねているのだろう)

犬上鳥籠の山、不知哉川などという所は、それほど目立つということもないので、どこがそこなのか判別もつかない。けれども名のある所は尋ねてみたかったが、このような旅の空には風流なものも面倒で通り過ぎました、田舎の旅による衰弱は、本当に後々までもつらい評判を漏らすなど、この山里の人に口止めしたいものがございます。

用語解説

いと 大変・非常に

けしき【気色】 ①様子②機嫌③兆し

なさけ【情け】 ①風流心②趣

こころあり【心あり】「目三変」 ①情緒がある②思いやりがある

おぼゆ「目ヤ下二」 ①思われる②思い出される③似る

あはれなり 趣深い

こころ【心地】 感じ・気持ち

なほ やはり

むつかし ①不快だ②面倒だ・わずらわしい③気味が悪い

ありし 以前の・(特に) 生前の

いたし はなはだしい

・否定を伴うと、「それほど〜ない」という意味になる。

わく【分く】「他下二」 ①区別する②理解する

すきずきし ①風情がある②好色めいている

うるさし ①わずらわしい②立派だ

げに ①本当に②なるほど

うし【憂し】 ①つらい・嫌だ②冷たい

(松田朋佳、築島愛美、市川裕圭)